

北海道における大学英語教育のニーズ分析

—— 北星学園大学の場合 ——

早 坂 慶 子

目 次

- I. 目的と背景
- II. 調査方法
- III. 結果と分析
- IV. カリキュラム編成への提言
- V. まとめ

I 目的と背景

言語教育においてニーズ分析を実施する場合、その目的の主たるものは、カリキュラムの編成や教室作業にかかわるものである。面接、アンケート、個別追跡調査、授業評価などの方法を用いてニーズを分析することによって、学習者の言語学習に対する考え方、学習姿勢、学習者の言語使用、言語態度はもとより、その学習者が学んでいる教育機関の姿勢も明らかになる。Richterich & Chancerel (1977) は学習者のニーズと彼等を取り巻く環境について、次のように述べている。

「そもそもニーズとは固定した一つ概念というよりは、学習者の知識と経験、あるいは、その学習者を取り巻く環境などとの相互作用の上に見られるものである。学習者は、現在おかれている状況の上になつて、これからしなければならぬこと、したいことを考慮し、その実現のための最良の方策を自由に選択しなければならない。」

したがってこうしたニーズ分析には教育機関の掲げる学習到達目標、カリキュラム編成、教材機器、管理する側、指導する側双方の考え方などが反映される。本研究では北星学園大学学生のニーズ分析を行い、大学生の英語教育に対する要望や態度について調査し、その結果をカリ

キュラム編成と教育環境整備への提言とすべく、アンケート調査を実施し、その結果を分析する。

ニーズ分析に関する研究は、日本ではあまり知られていない。比較的盛んに行われてきたのは欧米であるが、大学レベルでしかも英語教育に関するものという点、一般に公表されたものの数は非常に少ない。Lombardo (1988) はイタリアの4年制大学経済学専攻学生200名を対象に、英語のクラスについてニーズ分析を試みた。調査の結果、「仕事で英語を使いたい」や「英語母語話者でない人と意思の疎通をはかりたい」ことが、英語を学びたい理由であった。話し・理解することが、読み・書くことより重要視されている。

中国の学生について調査したものもある。Sun (1987) はカナダで、中国人大学院生37名、客員教授32名を対象に、「研究に必要な英語」と「生活に必要な英語」に関する質問を各15項目にわたり実施した。その結果、「研究に必要な英語」では学生、教員ともに「聞く力」に大きな関心を寄せていることがわかった。また、「生活に必要な英語」では、電話のかけ方やラジオ・映画・テレビの英語がわかる、新聞・雑誌が読めるといったコミュニケーションに必要な英語技能へのニーズの方が、道順の尋ね方やショッピングの仕方などよりは高いと報告されている。

わが国のニーズ分析の過程をみると、WiddowsとVoller (1991) のPANSI (Profile of Attitudes, Needs and Student Interests) がある。首都圏の大学生86名を対象に「大学生の要望、態度や関心事の概要研究アンケート」を実施し、現在学習している英語や到達目標について119項目にわたり調査した。その結果、「本調査の結果で最も注目すべき点は、学生が望んでいることと、実際に指導されていることの間には、大きなギャップがあることである」(p.134)と指摘している。学生が学びたい英語と、実際に受けている授業との間には明白な差があることがわかった。

さらにPANSIをもとに実施されたニーズ分析として、Harrison他(1992)の神田外国語学院学生796名を対象とした調査や、Bush他(1994)の神田外語大学学生348名を対象とした調査がある。カリキュラム編成のために教員や学生を対象に実施された両調査では、教える側と教えられる側でのニーズに相違があるとの結果が報告されている。

ニーズ分析ではないが、小池他(1985,1990など)による全国レベルで

の『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』では、10年間にわたって小学校、中学校、高等学校、大学の英語教員および学生、生徒、社会人約2万人を対象とした127項目に及ぶ膨大なアンケート調査を実施し、日本の英語教育の実態を明らかにしている。その結果、アンケート回答者の大部分が、日本の英語教育の現状に満足していないことがわかった。大卒社会人が学生時代にあればよかったと思う授業は「聞く力」67.8%、「話す力」75.1%であるが、大学教員は英語教育の重点を「読む力」に置き、両者間の英語教育に対する見方に食い違いがある。

北海道では、丸川（1992）の札幌大学学生119名を対象とした教養外国語科目についてのアンケート調査や、中屋（1992）の北星学園大学学生106名を対象とした授業形態志向調査がある。両調査結果とも、学生はコミュニケーション活動を取り入れた授業形態を望んでいると指摘している。また、西堀他（1994）による道内国公立大学12校4年生300名を対象に卒業直前に実施した大学英語教育の実態調査によれば、大学時代に受けた一般英語の授業形式で、最も多かったのは「講読」（42%）であるが、受けてみたかった授業形式では「会話」（46%）の希望者が多く、学生が希望している授業形式と現実に受講した授業は異なっているという結果が出ている。

以上みてきたように、ニーズ分析を行った結果、英語教育に関しては学生の志向が、コミュニケーションを重視した「聞く力」「話す力」の習得にあることがいわれている。また、実態調査からは、学生の希望する英語の授業と、現実に与えられている授業内容との間にはギャップがあることが明らかとなっている。大学生の英語教育に対する要望を知るために実態調査をし、ニーズを分析することは、今後の英語教育にとって重要であると思われる。

今回の調査では、以下の観点から、大学英語教育のニーズ分析を試みた。

- 1) 大学の入学目標
- 2) 卒業までに身につけたい英語の能力
- 3) 英語専攻学生に対する英語専攻の理由
- 4) 非英語専攻学生に対する英語選択の理由

II 調査方法

1 調査の目的

北星学園大学学生の大学入学の目標、大学卒業迄に身につけたい英語の能力、英語を学ぶ理由についてアンケート調査する。調査結果を男女別、英語専攻・非英語専攻別にそれぞれ分析し、学生の英語教育にたいするニーズを探る。

2 調査対象

北星学園大学文学部、経済学部 1, 2 年目学生 261 名にアンケート調査を実施した。⁽¹⁾

3 調査項目の作成

Widdows と Voller の PANSI を一部修正して本研究の調査項目が作成された。アンケートでは、まず回答者の属性に関する項目(学年、性別、学部学科、その他)に加えて、第 1 部は大学入学の目標をたずねる 14 項目、第 2 部は卒業迄に身につけたい英語の能力をたずねる 15 項目、第 3 部は英語専攻学生に英語を学ぶ理由をたずねる 16 項目、第 4 部は英語以外の専攻学生に英語を学ぶ理由をたずねる 16 項目、合計 61 項目からなる調査用紙を作成した。(資料参照、アラビア数字は項目番号)

第 1 部と第 2 部の項目では、回答の評価基準として PANSI 研究の 5 段階を 7 段階に変えた。第 3 部は英語専攻学生が、第 4 部は英語以外の専攻学生が「はい」と「いいえ」で回答する。両部は項目 A のみ異なっており、第 3 部の項目 A は「英語の教師になりたいから」を理由の一つとし、第 4 部では「たとえ英語が必修科目でなくても、あなたは英語を選択しますか」を問う。それ以降の 15 項目はいずれも英語を学ぶ理由を選ぶものである。

回答はマークシートを用い、回収後コンピュータで処理される。

4 調査実施手順

- (1) 新学期開始後 6 週間経った 6 月中旬に実施した。
- (2) 調査実施は本調査者が、関係者の協力を得て実施した。

- (3) 調査は授業時間を利用して実施し、平均 25 分かかった。回答者から記入中に調査項目について質問は一切出なかった。

5 調査実施後の処理

- (1) マークシートは回収後コンピュータで集計処理された。
 (2) 記入が不完全な、または記入が不正確なマークシートは除外された。
 (3) 有効回答者数は以下のとおりとなった。

学 科	男	女	合計	英語専攻
英 文 学 科	9	63	72	72
社会福祉学科	20	32	52	英語非専攻 134
経 済 学 科	33	20	53	
経営情報学科	12	17	29	
合 計	74	132	206	206

- (4) 有効抽出データは、Microsoft Excel 4.0 を用いて集計されたあと、SPSS を用いて処理された。
 (5) 分析については、第 1 部と第 2 部は各項目の平均値 (0~6) を、第 3 部と第 4 部は「はい」「いいえ」の頻度数 (%) を出した。第 1 部と第 2 部は、最初に回答者全体の大学入学目標と英語教育へのニーズを概観するために、最も高い平均値を示した項目から降順で並べた。次に男女別、英語専攻・非英語専攻別に差をみた。平均値は t 検定で有意差 ($p < .05$) を確認し、差の大きいものを取りあげて考察した。同様に、第 3 部は英語専攻学生の英語専攻理由、第 4 部は非英語専攻学生の英語選択理由について、最初に全体の傾向をみ、次に上記の 5 観点から、カイ 2 乗検定で有意差を確認し、比較した。
 (6) つぎに、第 2 部「卒業までに身につけたい英語の能力」について因子分析をしてその潜在的要因を探ってみた。

III 結果と分析

以下、本調査の結果と分析を述べる。その順序は次のとおりである。まず、各部の平均値をその数値の高い順に示し、学生の入学目標と英語教育のニーズに関して全体の傾向をみる。次に、男女別、専攻別にわけて、それぞれの差の大小で傾向を論じることとする。最後に第2部の結果を因子分析し、潜在要素を探る。

1 第1部 大学入学の目標

第1部の結果を平均値の高い順に並べると表1のようになる。

もっとも平均値が高かったのは、項目23「就職の可能性を高めるため」である。第3位の「資格を得るため」と併せ考えると、経済状況の影響を受け、就職に有利なように大学に入り、資格を得て卒業したいと学生は考えているようである。しかし、第2位に位置する項目32「学問知識を深めるため」第4位の項目22「人と会って友達になるため」などからは、学問知識の追求、人との出会いを求めて大学に入学してきた学生も

表1 大学入学目標

項 目	平 均	標準偏差	
23	4.61	1.32	就職の可能性を高めるため
32	4.30	1.36	学問知識を深めるため
33	4.28	1.59	資格を得るため
22	4.20	1.35	人と会って友達になるため
28	3.74	1.45	価値観や人生観を求めて深めるため
29	3.41	1.29	人間関係について学ぶため
25	3.41	1.65	仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため
26	3.32	1.53	趣味を生かす時間を得るため
30	3.26	1.24	自主的に勉強することを学ぶため
27	2.95	1.43	創造的才能を見つけて伸ばすため
34	2.65	1.38	日本や世界で起こっている出来事について関心を高めるため
24	2.36	1.56	親から独立するため
31	1.62	1.63	就職を避けるため
35	0.79	1.35	別に目標はない

(N=204)

多いといえる。つまり、就職の可能性を意識しながらも、学問知識、人との出会いを求める積極的な姿勢が現れている。逆に、項目 31「就職を避けるため」、項目 35「別に目標はない」の平均値は低く、消極的な目標を持って入学した学生は非常に少ないことがわかる。

次に第 1 部「大学入学の目標」について男女別、英語専攻・英語非専攻別に、有意差のあったものについて、その差を論じる。

1-1 男女別大学入学の目標

表 2 は大学入学の目標を男女で比較したものである。

有意差のあるものの多くは女子学生の方が高い数値を示している。項目 25「仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため」、項目 32「学問知識を深めるため」、項目 33「資格を得るため」などでは大きな差で女子の数値が高い。男子学生に比べて女子学生の方が大学入学の目標として仕事、学問双方への関心が高い。逆に男子学生の数値が女子学生のそれを上回っている項目に、項目 26「趣味を生かす時間を得るため」、項目 31「就職を避けるため」がある。

表 2 男女別大学入学の目標

項目		男	女
23	就職の可能性を高めるため	4.34	4.77
25	仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため	3.09	3.58
26	趣味を生かす時間を得るため	3.66	3.12
30	自主的に勉強することを学ぶため	2.95	3.43
31	就職を避けるため	2.27	1.25
32	学問知識を深めるため	3.64	4.67
33	資格を得るため	3.59	4.66
34	日本や世界で起こっている出来事について関心を高めるため	2.34	2.82
35	別に目標はない	1.32	0.51

$p < 0.05$

1-2 英語専攻・英語非専攻別大学入学の目標

つぎに表 3 は、大学入学の目標を英語専攻・英語非専攻別に比較した

表 3 英語専攻・英語非専攻別大学入学の目標

項 目		英 語 専 攻	英 語 非専攻
27	創造的才能を見つけて伸ばすため	3.31	2.76
28	価値観や人生観を求めて深めるため	4.03	3.58
30	自主的に勉強することを学ぶため	3.57	3.09
32	学問知識を深めるため	4.63	4.12
34	日本や世界で起きている出来事について関心を高めるため	2.92	2.50
35	別に目標はない	0.42	0.99

$P < 0.05$

ものである。

項目 35 を除いてはいずれも英語専攻の数値が英語非専攻のそれを上回っている。その差の大きなものに項目 27「創造的才能を見つけて伸ばすため」、項目 30「自主的に勉強することを学ぶため」、項目 32「学問知識を深めるため」などがある。

2 第 2 部 卒業までに身につけたい英語の能力

第 2 部の結果を平均値の高い順に並べると表 4 のようになる。

もっとも平均値が高かったのは項目 41「海外へ行ったとき、英語で様々な日常的状況に対処すること」であった。海外体験を視野に入れたコミュニケーションのための英語学習を望んでいることがわかる。第 2 位項目 50「英語で自分自身の考えや感情について話すこと」、第 4 位項目 53「英語のすばらしい発音を身につけること」などと併せ考えると、積極的に自分を表現するための英語習得への関心が高いといえる。と同時に、項目 42「英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること」項目 43「英語の本や雑誌や新聞を読むこと」の平均値が高いことから、趣味・娯楽を生かして英語を習得したい、あるいは、情報入手のために英語を身につけたいとするものが多いことがわかる。これらの項目に続いて英語の基礎能力習得に結びついた、項目 49「英語を日本語に円滑に訳すこと」、項目 46「英語で礼儀正しい会話をすること」、項目 45「英語の単語やイディオムをたくさん覚えること」が現れている。また、下位

表4 卒業までに身につけたい英語の能力

項目	平均	標準偏差	
41	4.82	1.20	海外へ行ったとき、英語で様々な日常的状況に対処すること
50	4.46	1.56	英語で自分自身の考えや感情について話すこと
42	3.96	1.47	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること
53	3.86	1.43	英語のすばらしい発音を身につけること
43	3.81	1.36	英語の本や雑誌や新聞を読むこと
49	3.63	1.43	英語を日本語に円滑に訳すこと
46	3.59	1.36	英語で礼儀正しい会話をする事
45	3.25	1.36	英語の単語やイディオムをたくさん覚えること
52	3.22	1.42	英語のビジネスレターやメモやテレックスなどを 読んだり書いたりすること
44	3.15	1.35	英語で手紙や小説や詩などを書くこと
51	2.82	1.38	英語の文法に精通すること
48	2.64	1.43	英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと
47	2.59	1.39	英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること
55	2.39	1.43	英語で学問的または専門技術的な討論をすること
54	2.18	1.32	英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと

(N=206)

4項目、項目48「英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと」、項目47「英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること」、項目55「英語で学問的または専門技術的な討論をすること」、項目54「英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと」など、英語の専門技術能力の習得に対する関心は低い。

次に第2部「卒業までに身につけたい英語の能力」について男女別、英語専攻・英語非専攻別に、有意差のあったものについて、その差を論じる。

2-1 男女別卒業までに身につけたい英語の能力

表5は、卒業までに身につけたい英語の能力について男女比較したものである。

有意差の出た項目ではすべてにわたって女子学生の数値が男子学生の

表 5 男女別卒業までに身につけたい英語の能力

項 目		男	女
42	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること	3.34	4.30
43	英語の本や雑誌や新聞を読むこと	3.38	4.05
44	英語で手紙や小説や詩などを書くこと	2.59	3.45
45	英語の単語やイディオムをたくさん覚えること	3.04	3.37
50	英語で自分自身の考えや感情について話すこと	3.96	4.73
53	英語のすばらしい発音を身につけること	3.23	4.22

P < 0.05

数値を上回っている。特に差の大きなものに項目 42「英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること」、項目 50「英語で自分自身の考えや感情について話すこと」、項目 53「英語のすばらしい発音を身につけること」がある。男子学生に比べて女子学生は自己表現のための英語の習得、趣味を生かすための英語の習得への関心が高い。

2-2 英語専攻・英語非専攻別卒業までに身につけたい英語の能力

表 6 は、卒業までに身につけたい英語の能力について英語専攻・英語非専攻を比較したものである。

卒業までに身につけたい英語の能力に関しては、英語専攻と英語非専攻との間で違いがある。第 2 部のすべての項目にわたって有意差が見られ、英語専攻の数値が英語非専攻の数値を上回っている。特にその差が 1.00 以上あるものに項目 43「英語の本や雑誌や新聞を読むこと」、項目 50「英語で自分自身の考えや感情について話すこと」、項目 53「英語のすばらしい発音を身につけること」、項目 55「英語で学問的または専門技術的な討論をすること」がある。両者のカリキュラムには異なった要素を取り入れる必要がある。両者を比較した場合、英語専攻の方に自己表現力を養い、ディスカッションをする、あるいはそれに必要な情報入手ができるような内容の授業展開が期待されているといえよう。

表 6 英語専攻・英語非専攻別卒業までに身につけたい英語の能力

項目		英 語 専 攻	英 語 非専攻
41	海外へ行ったとき、英語で様々な日常的状况に対処すること	5.26	4.57
42	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること	4.72	3.54
43	英語の本や雑誌や新聞を読むこと	4.56	3.41
44	英語で手紙や小説や詩などを書くこと	3.76	2.81
45	英語の単語やイディオムをたくさん覚えること	3.65	3.04
46	英語で礼儀正しい会話をすること	4.04	3.34
47	英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること	3.15	2.28
48	英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと	3.26	2.30
49	英語を日本語に円滑に訳すこと	4.13	3.37
50	英語で自分自身の考えや感情について話すこと	5.51	3.89
51	英語の文法に精通すること	3.24	2.59
52	英語のビジネスレターやメモやテレックスなどを読んだり書いたりすること	3.69	2.96
53	英語のすばらしい発音を身につけること	4.67	3.43
54	英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと	2.63	1.94
55	英語で学問的または専門技術的な討論をすること	3.10	2.01

$p < 0.05$

3 第3部 英語専攻の理由

全体の 35.0%を占める英文学科生 72 名 (男子 9 名, 女子 63 名) が英語を専攻した理由を「はい」「いいえ」で答えた結果が表 7 である。

もっとも高い値を得たのは項目 61「英語が役に立つ仕事に就きたいから (英語教師以外で)」で 86%が「はい」と答えている。わずか 1%の違いでこれに続くのが項目 72「英語は国際語として日本のビジネスにも必要だから」で 85%が「はい」と答えている。この 2 項目から、就職・ビジネスと英語学習との結びつきが強いことがわかる。続く 7 項目、項目 74「日本人と違う考え方を学びたいから」、項目 65「英語を話す外国人と友達になりたいから」、項目 66「英語の本や雑誌や新聞などを読みたいから」、項目 73「英語圏の文化について学びたいから」、項目 64「英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから」、項目 68「海外旅行をしたい

表 7 英語専攻の理由

項 目	平 均	標準偏差	
61	86%	0.35	英語が役に立つ仕事に就きたいから(英語教師以外で)
72	85	0.36	英語は国際語として日本のビジネスにも必要だから
74	79	0.41	日本人と違う考え方を学びたいから
65	79	0.41	英語を話す外国人と友達になりたいから
66	78	0.42	英語の本や雑誌や新聞などを読みたいから
73	75	0.44	英語圏の文化について学びたいから
64	72	0.45	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから
68	71	0.46	海外旅行をしたいから
62	69	0.46	国際人になりたいから
63	64	0.48	中学校や高校で英語の成績が良かったから
71	58	0.50	短期語学研修をしたいから
70	49	0.50	長期留学をしたいから
69	47	0.50	外国で仕事をしたいから
75	29	0.46	海外で起こっている出来事に遅れたくないから
60	17	0.38	英語の教師になりたいから
67	6	0.23	英語が楽な科目だから

(N=72) (はい, いいえで回答。数字は「はい」と答えたものの%)

から」, 項目 62「国際人になりたいから」も高い数値を得ている。異文化に関心を寄せ, 国際的感覚を身につけ, それに必要な情報を英語で入手したい, そのために英語を専攻したといえる。

3-1 男女別英語専攻の理由

次に第 3 部「英語専攻の理由」について男女別に, 有意差のでたもの

表 8 男女別英語専攻の理由

項 目		男	女
60	英語の教師になりたいから	.44	.13
62	国際人になりたいから	.22	.76
65	英語を話す外国人と友達になりたいから	.44	.84
71	短期語学研修をしたいから	.22	.63
72	英語は国際語として日本のビジネスにも必要だから	.56	.89

$p < 0.05$

について、その差を論じる。

表8は、「英語専攻の理由」について男女比較したものである。

項目60「英語の教師になりたいから」では男子学生が女子学生の数値を上回っているが、その他の項目についてはすべて女子学生の数値が高い。特に差が大きいのは項目62「国際人になりたいから」である。

4 第4部 英語選択の理由

英文学科以外の回答者134名について、「たとえ英語が必修でなくても、あなたは英語を選択しますか」とたずね、「はい」と答えたものは93名(非英語専攻の69.4%)である。表9の数値は、この93名について得た回答である。

全体の84%が項目91「英語は国際語として日本のビジネスにも必要だから」英語を選択するとしている。卒業後の就職を照準に入れた英語のニーズが現れている。項目87「海外旅行をしたいから」に78%が「はい」と答えている。以下5項目、項目84「英語を話す外国人と友達になりたいから」、項目85「英語の本や雑誌や新聞などを読みみたいから」、項目

表9 英語選択の理由

項目	平均	標準偏差	
91	84%	0.37	英語は国際語として日本のビジネスにも必要だから
87	78	0.41	海外旅行をしたいから
84	68	0.47	英語を話す外国人と友達になりたいから
85	63	0.48	英語の本や雑誌や新聞などを読みみたいから
83	61	0.49	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから
93	54	0.50	日本人と違う考え方を学びたいから
81	51	0.50	国際人になりたいから
92	37	0.48	英語圏の文化について学びたいから
94	32	0.47	海外で起こっている出来事に遅れたくないから
80	29	0.46	英語が役に立つ仕事に就きたいから
90	25	0.43	短期語学研修をしたいから
88	24	0.43	外国で仕事をしたいから
89	18	0.39	長期留学をしたいから
82	15	0.36	中学校や高校で英語の成績が良かったから
86	5	0.23	英語が楽な科目だから

(N=93) 数字は「はい」と答えたもの(%)

83「英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから」、項目 93「日本人と違う考え方を学びたいから」、項目 81「国際人になりたいから」には 50%以上が「はい」と回答している。外国人との交流を深め、国際的感覚を身につけたい、それに必要な情報を英語で入手したい、また趣味とのつながりで英語を習得したい、そのために英語を選択するといえる。

4-1 男女別英語選択の理由

次に第 4 部「英語選択の理由」について男女別に、有意差のでたものについて、その差を論じる。

表 10 は、「英語選択の理由」について男女比較したものである。

表 10 男女別英語選択の理由

項 目		男	女
92	英語圏の文化について学びたいから	.49	.27

$p < 0.05$

男女間で差が見られたのは項目 92「英語圏の文化について学びたいから」のみで、男子学生の数値が女子学生の数値より高い。

5 因子分析

第 2 部「卒業までに身につけたい英語の能力」について、英語専攻、英語非専攻で項目間に共通してはたらいっている潜在的要素を知るために、バリマックス法による因子分析を行った。因子負荷量が .5 以上のものについての結果は以下ようになる。

5-1 英語専攻

英語専攻で「卒業までに身につけたい英語の能力」では 4 因子が抽出された。この 4 因子で全体の 68.9%が説明されている。第 I 因子は [専門技術的英語の能力] を表し、寄与率が 35.7%である。この能力については、技能シラバスに基づいた指導、content-based な指導が必要となる。第 II 因子は [英語の基礎能力] を表し、寄与率は 13.4%である。教室作業を中心にこの能力を養成することができる。第 III 因子は [情報入

第Ⅰ因子 EIGENVALUE 5.35 (寄与率 35.7%)	因子負荷量
47 英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること	0.88
55 英語で学問的または専門技術的な討論をすること	0.82
48 英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと	0.82
54 英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと	0.79
第Ⅱ因子 EIGENVALUE 2.00 (寄与率 13.4%)	因子負荷量
45 英語の単語やイディオムをたくさん覚えること	0.79
49 英語を日本語に円滑に訳すこと	0.71
51 英語の文法に精通すること	0.70
第Ⅲ因子 EIGENVALUE 1.76 (寄与率 11.7%)	因子負荷量
43 英語の本や雑誌や新聞を読むこと	0.92
42 英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること	0.89
44 英語で手紙や小説や詩などを書くこと	0.50
第Ⅳ因子 EIGENVALUE 1.21 (寄与率 8.1%)	因子負荷量
41 海外へ行った時、英語で様々な日常的状況に対処すること	0.76
53 英語のすばらしい発音を身につけること	0.75
50 英語で自分の考えや感情について話すこと	0.64

手のための英語能力]で寄与率は11.7%である。視聴覚教材の多角的利用、e-mailなどを通しての情報交換などがその対応策として考えられる。そして第Ⅳ因子は[自己表現・生活のための英語能力]を表し、寄与率は8.1%である。コミュニケーションのための英語、異文化理解などが必要になる。

5-2 英語非専攻

英語非専攻の「卒業までに身につけたい英語の能力」でも4つの因子が抽出された。この4因子で全体の75.0%が説明されている。第Ⅰ因子は[専門技術的英語の能力]を表し、寄与率が45.1%である。この能力については、技能シラバスに基づいた指導、content-basedな指導が必要となる。第Ⅱ因子は[情報入手のための英語能力]で寄与率は14.8%で

第Ⅰ因子 EIGENVALUE 6.75 (寄与率 45.1%)	因子負荷量
54 英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと	0.89
55 英語で学問的または専門技術的な討論をすること	0.86
48 英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと	0.82
47 英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること	0.79
第Ⅱ因子 EIGENVALUE 2.22 (寄与率 14.8%)	因子負荷量
43 英語の本や雑誌や新聞を読むこと	0.84
44 英語で手紙や小説や詩などを書くこと	0.81
42 英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること	0.76
52 英語のビジネスライターやメモやテレックスなどを 読み書きしたりすること	0.51
第Ⅲ因子 EIGENVALUE 1.20 (寄与率 8.0%)	因子負荷量
41 海外へ行った時、英語で様々な日常的状況に対処すること	0.78
50 英語で自分の考えや感情について話すこと	0.78
53 英語のすばらしい発音を身につけること	0.66
第Ⅳ因子 EIGENVALUE 1.06 (寄与率 7.1%)	因子負荷量
45 英語の単語やイディオムをたくさん覚えること	0.84
51 英語の文法に精通すること	0.81
49 英語を日本語に円滑に訳すこと	0.64
46 英語で礼儀正しい会話をする事	0.50

ある。視聴覚教材の多角的利用、e-mail などを通しての情報交換、ビジネス英語指導などがその対応策として考えられる。そして第Ⅲ因子は[自己表現・生活のための英語能力]を表し、寄与率は8.0%である。コミュニケーションのための英語、異文化理解などが必要になる。第Ⅳ因子は[英語の基礎能力]を表し、寄与率は7.1%である。教室作業を中心にこの能力を養成することができる。

以上の因子分析結果を見る限り、英語専攻・英語非専攻ともに、卒業までに身につけたい英語の能力については、4つの因子により、その特徴を明らかにすることができた。この結果で注目すべき点は、従来言わ

れ続けてきた4技能（読む、話す、聞く、書く）の要素が、複数の因子に散らばって存在していることである。それぞれを個別に指導するよりは、総合的に英語の能力を養成すべきである。

IV カリキュラム編成への提言

前章でみたアンケート調査の結果から、大学生の英語教育に対するニーズを知ることができた。そのニーズに応えるためには、カリキュラム編成に当たって、以下のような事柄が考慮されるべきであると思われる。

- (1) 卒業までの資格取得、卒業後の就職を照準に入れた英語教育の必要性。ビジネス英語など ESP (English for Specific Purposes) への対応。TOEFL, TOEIC, 英検などへの対応も資格取得の面から考慮されるべきである。
- (2) 海外への関心が高く、それへの対応として英語力の養成が望まれている。全学科に共通して、海外研修プログラムの実現を考慮すべき時がきている。また、その際の事前、事後研修を強化し、異文化学習や、コミュニケーション方策が盛り込まれたプログラムを作成する必要がある。
- (3) 英語で自分の考えや感情を表現するためには、少人数クラスでネイティブスピーカーによる授業が望ましい。さらには外国人との交流を通して学習を促進するために、留学生受け入れプログラムなどが考えられる。異文化接触、人的交流のための環境づくりもカリキュラムの一貫としてとらえられるべきである。
- (4) メディアを使った英語習得に関心を示している。視聴覚教材、e-mail、CALL プログラムなどを利用した教育展開を促進する時期である。多様化している個々人の専門領域に関連した教材で、自主的に学習するためには、個別学習システムの確立した、メディアセンターのような設備を充実させることが望ましい。
- (5) 伝統的な4技能の習得を個別にとらえるのではなく、総合的な英語能力の養成が実現するような方策を講じるべきである。

V まとめ

以上、北星学園大学1, 2年目学生206名の大学入学目標と英語教育へのニーズについて実施したアンケート調査結果を概観した。本調査に回答した学生の大学入学目標は、1) 就職の可能性を高めるため、2) 学問知識を深めるため、3) 資格を得るため、4) 人と会って友達になるため、の順で高かった。調査実施時期の経済状況との関係も大きいと思われるが、就職を意識した項目が上位にある。同時に学問知識の追求、人間関係の拡大を入学目標としてあげた学生が多い。

このような目標で入学した大学生は、英語教育に関しても、コミュニケーションのための英語の習得に強い関心を示している。卒業までに身につけたい英語の能力として「海外へ行ったとき、英語でさまざまな日常的状况に対処すること」「英語で自分自身の考えや感情について話すこと」などが高い数値を示した。海外旅行・生活体験を視野に入れ、コミュニケーションの中で自己表現を確立したい、その実現のために英語を習得したいと考えている。

英文学科学生が英語を専攻する理由でもっとも多いのは「英語が役に立つ仕事に就きたいから」である。第1部の入学目標で、就職への関心の高さはすでに見たとおりである。これらを照らし合わせると、英文学科生は、英語が役に立つような仕事に就くことと、大学で英語を学ぶことを強く結びつけている。一方、非英語専攻学生の中で英語を選択した学生について、英語を学ぶ理由として最も多く挙げているのは、「英語は国際語として、日本のビジネスにも必要だから」である。それに続いて多いのが「海外旅行をしたいから」である。この2項目から、英語非専攻学生で英語を学びたいとする学生は、将来就職した場合、広い意味で英語の必要性を認識していること、また海外旅行への関心が高いことなどがわかる。

調査全体を通して、男子学生に比べて女子学生に積極的な姿勢がみられる。具体例をあげると、大学入学の目標に関しては、学問・知識の追求や資格取得など、実践・学問の双方に関心が高い。また卒業までに身につけたい英語の能力では、自己表現に必要な技能、発音の習得や趣味につながる映画・テレビを理解するための英語習得により高い関心を示

している。

1991年文部省は大学設置基準を改めた。大学における外国語教育の目的は「当該言語の言語運用能力の養成をはかることによって異言語文化を体験し、異なる人間の世界を発見し、人格的な陶冶をはかることにある。」外国語教育への取り組みは大学独自で検討しなければならない。従って今この時期に、大学における英語教育の目標を設定し、カリキュラム編成に際して、学習者のニーズ分析結果を十分に生かすことは、的を射たことといえよう。本研究が大学英語教育において、そのカリキュラム展開の一助となることを期待するものである。

【付記】

本研究は、平成5年度北海道科学研究費補助による共同研究「北海道における大学英語教育のニーズ分析」の一部である。共同研究者は、米坂スザンヌ、シンシア・エドワーズ、ジェラルドP. ハルボーセン、佐藤ゲール、小林サリー、吉田翠、堀内満智子、早坂慶子の8名である。

【注】

- (1) 北海道科学研究費補助による「北海道における大学英語教育のニーズ分析」の対象となったのは道内にある全私立大学・短期大学45校（短期大学27校、4年制大学16校、6年制大学2校）の1,2年目学生およそ5000名であり、これは1994年度入学定員数の約30%に相当する。各大学の被調査者をこの割合で配分したため、北星学園大学の対象者数は約260名となった。

参考文献

- Busch, M., M. Elsea, P. Gruba & F. Johnson. (1994). 'A study of the needs, preferences and attitudes concerning the learning and teaching of English Proficiency as expressed by students and teachers at Kanda University'. 『神田外語大学紀要第6号』 pp.174-235.
- Harrison, I., P. Gruba & L. Kanberg. (1992). A Survey of Japanese Vocational Student Needs. Unpublished paper presented at the 1992 Japan Association of Language Teachers 18th Annual Conference on Language Teaching and Learning. November 20-23, 1992. Kawagoe, Japan.



- 小池生夫他 (1985) 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究Ⅱ—学生の立場—』 JACET.
- 小池生夫他(1990)『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』 JACET.
- Lombardo, Linda. (1988). *Language Learner's Needs, Interests and Motivation: A Survey of EFL Students in an Italian Economics Faculty*. ERIC number ED 304 006. FL 017 802.
- 丸川桂子(1993)「カリキュラム改革に向かって」『リベラル アーツ No.7』札幌大学教養部 pp.90-100.
- Nakaya, Akira. (1992) "A Survey of English Language Learning-Style Preferences" *Hokusei Review* 29. pp.241-279.
- 西堀ゆり他 (1994) 「全道大学英語教育の実態調査—道内12大学4年目学生アンケート調査を踏まえて」北海道大学言語文化部紀要25 pp. 97-137.
- Richterich, Rene & Chancerel J. L. (1977). *Identifying the Needs of Adults Learning a Foreign Language*. Council for cultural co-operation of the Council of Europe. pp.5-106.
- Sun, Yilin. (1989). *An ESL Needs Assessment: Chinese Students at a Canadian University*. ERIC number E 314 956. FL 018 310.
- Widdows, S., & Voller, P. (1991). PANSI: A Survey of the ELT Needs of Japanese University Students. *Cross Currents*, 18 (2), pp.127-141.
- 米坂スザンヌ, シンシア・エドワーズ, ジェラルド P. ハルボーセン, 佐藤 デール, 小林サリー, 吉田翠, 堀内満智子, 早坂慶子(1994)『北海道における大学英語教育のニーズ分析』平成5年度北海道科学研究事業研究成果報告書。

〈資料〉

大学生の態度・要望・関心事の概要についてのアンケート
回答のしかたについての諸注意

1. 第1部と第2部は全員が回答します。第3部は英語を専攻している学生が、第4部は英語以外を専攻している学生が回答します。あなたに該当する各部のすべての項目に回答してください。回答しない項目があると、すべてが無効になりますので注意してください。
2. 第1部～第4部のそれぞれの指示に従って、該当するところをマークしてください。(つまり該当するところの○を、黒く塗りつぶしてください。)

マーク例

良い例	悪い例
	

(* 薄くて読み取れない)

3. 回答には HB の黒鉛筆 (シャープペンシルも可) またはそれに近いものを使用し、回答を訂正する場合にはプラスチック消ゴムで完全に消してください。
4. 回答用紙は汚したり折曲げたりしないでください。また所定以外のところには記入しないでください。
5. アンケート用紙には絶対に何も書かないでください。
6. 回答用紙と共にアンケート用紙も提出してください。
7. 時間を十分に取って回答してください。

〈資料〉

大学生の態度・要望・関心事の概要についてのアンケート

第 1 部 学生全員

あなたがこの大学に入って 2 年間または 4 年間で過ごす目標は何ですか。項目 A～N に、次の 7 段階基準で答えてください。あなたの場合に当てはまるところの数字をマークしてください。

- 7 段階基準
- 0 全然当てはまらない
 - 1 ほとんど当てはまらない
 - 2 あまり当てはまらない
 - 3 少し当てはまる
 - 4 かなり当てはまる
 - 5 大部分当てはまる
 - 6 完全に当てはまる

- ② A 人と会って友達になるため
- ③ B 就職の可能性を高めるため
- ④ C 親から独立するため
- ⑤ D 仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため
(例えばコンピュータの使い方, 自動車の整備など)
- ⑥ E 趣味を生かす時間を得るため
(例えばスポーツ, 音楽, 旅行など)
- ⑦ F 創造的才能を見つけて伸ばすため
- ⑧ G 価値観や人生観を求めて深めるため
- ⑨ H 人間関係について学ぶため
- ⑩ I 自主的に勉強することを学ぶため
- ⑪ J 就職するのを避けるため
- ⑫ K 学問知識を深めるため
- ⑬ L 資格を得るため
(例えば英検, 教員免許状, 会計士など)

- ③④ M 日本や世界で起こっている出来事について関心を高めるため
③⑤ N 別に目標はない
(マークシートのO～S欄は今回使いません)

第2部 学生全員

英語を学ぶことに関して、あなたは卒業するまでに、どのような英語の能力を身につけたいですか。項目A～Oに、次の7段階基準で答えてください。あなたの場合に当てはまるところの数字をマークしてください。

- 7段階基準 0 全然大切ではない
1 ほとんど大切ではない
2 あまり大切ではない
3 少し大切である
4 かなり大切である
5 非常に大切である
6 絶対に大切である
- ④① A 海外へ行ったとき、英語でさまざまな日常的状況に対処すること
(例えば外食したり買い物をするときなど)
- ④② B 英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること
④③ C 英語の本や雑誌や新聞などを読むこと
④④ D 英語で手紙や小説や詩などを書くこと
④⑤ E 英語の単語やイディオムをたくさん覚えること
④⑥ F 英語で礼儀正しい会話をすること
④⑦ G 英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること
④⑧ H 英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと
④⑨ I 英語を日本語に円滑に訳すこと
④⑩ J 英語で自分自身の考えや感情について話すこと
④⑪ K 英語の文法に精通すること
④⑫ L 英語のビジネスレターやメモやテレックスなどを読んだり書き

たりすこと

- ⑤③ M 英語のすばらしい発音を身につけること
- ⑤④ N 英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと
- ⑤⑤ O 英語で学問的または専門技術的な討論をすること
(マークシートのP～S欄は今回使いません)

第3部 英語を専攻している学生

あなたはなぜ英語を専攻したのですか。項目A～Pに、「はい」の人はYを、「いいえ」の人はNをマークしてください。

- ⑥⑩ A 英語の教師になりたいから
- ⑥⑪ B 英語が役に立つ仕事につきたいから (英語教師以外で)
- ⑥⑫ C 国際人になりたいから
- ⑥⑬ D 中学校や高校で英語の成績が良かったから
- ⑥⑭ E 英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから
- ⑥⑮ F 英語を話す外国人と友達になりたいから
- ⑥⑯ G 英語の本や雑誌や新聞などを読みたいから
- ⑥⑰ H 英語がらくな科目だから
- ⑥⑱ I 海外旅行をしたいから
- ⑥⑲ J 外国で仕事をしたいから
- ⑦⑰ K 長期留学をしたいから
- ⑦⑱ L 短期語学研修をしたいから
- ⑦⑲ M 英語は国際語として日本のビジネスにも必要だから
- ⑦⑳ N 英語圏の文化について学びたいから
- ⑦㉑ O 日本人と違う考え方を学びたいから
- ⑦㉒ P 海外で起こっている出来事に遅れたくないから
(マークシートのQ～S欄は今回使いません)

第4部 英語以外を専攻している学生

次の資問Aに、「はい」の人はYを、「いいえ」の人はNをマークしてください。

- ⑦⑨ A たとえ英語が必修科目でなくても、あなたは英語を選択しますか。
Nをマークした人は、ここで回答は終わりです。
Yをマークした人は、なぜ英語を選択したいのですか。項目B～Pに、「はい」の人はYを、「いいえ」の人はNをマークしてください。
- ⑧⑩ B 英語が役に立つ仕事につきたいから
⑧⑪ C 国際人になりたいから
⑧⑫ D 中学校や高校で英語の成績が良かったから
⑧⑬ E 英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから
⑧⑭ F 英語を話す外国人と友達になりたいから
⑧⑮ G 英語の本や雑誌や新聞などを読みたいから
⑧⑯ H 英語がらくな科目だから
⑧⑰ I 海外旅行をしたいから
⑧⑱ J 外国で仕事をしたいから
⑧⑲ K 長期留学をしたいから
⑧⑳ L 短期語学研修をしたいから
⑧㉑ M 英語は国際語として日本のビジネスにも必要だから
⑧㉒ N 英語圏の文化について学びたいから
⑧㉓ O 日本人と違う考え方を学びたいから
⑧㉔ P 海外で起こっている出来事に遅れたくないから
(マークシートのQ～S欄は今回使いません)

*アルファベットの前の数字は、本論文の分析のために用いた項目番号である。

An EFL Needs Analysis of the Students of Hokusei Gakuen University

Keiko HAYASAKA

A survey of 206 EFL students' needs was conducted to investigate their (1) objectives for attending college, (2) desired English skills at college, and (3) reasons for majoring in or electing English. Data was analyzed to identify overall trends and trends by gender and by major. Factors of the desired English skills were also examined to find the underlying pattern of the students' needs.

Results indicate that the students entered Hokusei Gakuen University in order to enhance job prospects and to deepen their knowledge of academic subjects. Two of the most frequent reasons of cited by English majors for studying English are "to get a job where English is useful" and "Business people need to know English." Non-English majors also ranked the latter item as most important reason for studying English. Students closely relate greater job opportunities and learning English.

"English skills coping in a variety of everyday situations when they are abroad" ranked the highest among the skills all students indicated that they wanted to acquire. To get "English skills to express themselves" also ranked high. Students want to acquire skills with which they can communicate and express themselves.

In the comparison of male and female students, female students show higher and stronger interest in getting skills by studying English. In the comparison of majors and non-majors, English majors have higher interest in all items of "desired English skills." The desired skills of all students are 'specialized language competencies', 'core language competencies', 'self-development competencies', and 'survival competencies.' Speaking, listening, reading and writing are inherent components of each competency.

Holistic teaching methods rather than enforcing each skill individually are suggested as possible ways to satisfy students' needs.

At the end, some suggestions are made for the development of English curriculum for college English teaching.